

研究題目：台湾シラヤ族の民族的アイデンティティの形成に関する人類学的研究——博物館資料の社会還元と先住民族の手工芸再興を中心に

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

D15-R-0015 呂怡屏

一、はじめに

本研究は、台湾の平埔族に属するシラヤ族とタイヴォアン族の文化復興の過程におけるエスニシティの生成および、民族アイデンティティが形成されるメカニズムを明らかにするものである。さらに、台湾における平埔族の政治と文化運動を背景にして、台湾社会において、位置づけが曖昧にされてきた「平埔族」の権利を促進することで、社会の新たな価値を生まれることを検証する。

報告者は平成 28 年度から 29 年度にかけて、台湾の台南市におけるシラヤ族の G 集落と、かつて人類学者にシラヤ族と分類されてきたが自然災害に見舞われてからタイヴォアン族としての民族意識を高めてきた高雄市における S 集落を研究対象とした。具体的な研究内容は、シラヤ族が原住民族としての法的地位を取り戻す「正名運動」の最新動向と、G 集落と S 集落において刺繍工芸を伝統工芸として位置づける動き、および博物館に収蔵されている刺繍工芸品が平埔族により再製される過程の観察、記録、聞き取り調査である。

1990 年代半ば、台湾のオーストロネシア語族の言語を母語とする先住民は「原住民族」としての「法的地位」を得た。しかし、その中に、「平埔族」と呼ばれるオーストロネシア系先住民族は含まれなかった。平埔族は清朝時代から漢族化が進んだ人たちの子孫を指す。現在、台湾社会ではその大半が原住民の身分を有していない。したがって、平埔族の人たちは今でも原住民族としての「法的地位」を得られるための政治運動を継続している。

歴史的な経緯から見ると、17 世紀以降、多数者である漢族と同じ西部の平野地域に暮らしている「平埔族」は、漢族に差別されないように、平埔族もしくは

先住民族であることを隠した。1980年代以降の民主化の潮流の中で、「平埔族」の人びとは原住民としての意識を持つようになった。1990年代以降盛んになってきた原住民族運動とともに、「平埔族」の政治的・文化的権利への要求が強くなってきた。

本報告は二部構成で調査結果を記述する。前半は、台湾の平埔族が「正名運動」という政治運動を起こした経緯、および正名運動の現状とシラヤ族の正名運動リーダーの対応を取り上げる。報告の後半は台湾南部におけるシラヤ族とタイヴォアン族の文化復興、特に刺繍工芸の再興をめぐる経緯と現状を報告する。

## 二、調査対象と背景——平埔族のシラヤ族とタイヴォアン族

本報告における「平埔族」とは、単一の民族の名称ではなく、台湾のオーストロネシア系先住民族<sup>1</sup>のうち、漢化の進んだ部族など集団の総称である。清朝時代(1636-1912)から日本統治時代(1895-1945)のはじめにかけては「熟番」、「熟蕃」と称された。日本統治時代に日本人の研究者により、「平埔族」という名称が公式に使用されるようになった(清水 2005: 106-107)。1945年以後は中華民国政府がこの分類に基本的に従った。この段階では、平埔族の人々は、「平埔族」と通称され、先住民族としては法的には位置づけられなかった。

本報告で注目する台湾のシラヤ族の人々は16世紀から、ヨーロッパ人、大陸からの渡来人、または漢民族などの外来勢力と接触してきた。シラヤ族は台湾の嘉南平原と屏東平原地域に住む二つのグループに区分できる。嘉義市と台南市を渡る嘉南平原に住んでいたグループは新港社、大目降社、蕭壠社、麻豆社という四社に分けられる。本報告は現在の台南市におけるかつて蕭壠社から移住してきたG集落を取り上げている。

台南市は台湾の南西部に位置して、嘉南平原の中心部にあり、東は中央山脈の前山地帯、西は台湾海峡、北は嘉義県と隣接し、南は高雄市と隣接する。G集落は、現在台南市東山区の南の平原と丘陵の間に位置している。村の南側に亀重溪を流れている。清朝時代以前、ここは平埔族に属するホアニヤ族の哆囉囑社の領域であった。乾隆56年(1791年)に屯守のため、蕭壠社人を中心として、さらに近隣のタイヴォアン社人、麻豆社人もここに移住させられた。日本統治時代の昭和5年(1930年)以降、村は台南州新営郡番社庄に属し、中華民国政府統治以降、集落台南市の東山区に属することになる。

1990年代前半、G集落出身のD氏はシラヤ族の文化保存の重要性を痛感した

ため、故郷に戻り、集落に在住している一部の若者ととも文化を伝承する試みを始めた。一方、同じ90年代の1995年、台南市政府がシラヤ族の文化活動、特に祭りをおこなうための補助金を交付し始めた。メディアによる報道もなされ、シラヤ族の文化活動は一般市民に知られるようになってきた。

本報告におけるもう1つの調査地はタイヴォアン族が多く暮らしている地域である。タイヴォアン族とよばれる人びとは、台湾における台南の中西部の山域と高雄の北部山域に暮らしている。タイヴォアン族は17世紀中頃には、現在の台南における玉井、楠西、大内といった平野部に近い地域に暮らしていた。1860年代以降、漢民族と生活空間が競合した結果、彼らは曾文溪と楠梓仙溪に沿って上流域に移住し、2つのグループに分かれたとされている。1つのグループは現在の高雄市の山域に移住し、「四社番」と呼ばれていた。もう1つのグループは現在の台南市の山沿いに移住し、「タイヴォアン派社」を建てた(洪麗完 2012:32-33)。日本統治時代の言語学の研究者である小川尚義が提出した分類を援用し、タイヴォアン族は、平埔族のシラヤ族における一支族と見なされてきた。

本報告で注目するS集落は、かつて「四社番」と呼ばれていたタイヴォアン族に属する一群の人々が多く暮らしていた村である。2009年の台風による被害(八八水害)を受ける以前のS集落は、高雄市の北東の甲仙区に位置し、玉山山脈と阿里山山脈に挟まれて、楠梓仙溪の左岸に位置する細長い沖積地に立地していた。周辺地域はほぼ山林が占めていた。2009年の八八水害で、S集落は甚大な被害をうけ、村全体が土石流に飲み込まれた。災害後におこなわれたS集落をめぐる歴史と文化の研修により、もとS集落に住んでいた人たちは、災害後にタイヴォアン族としての意識を強めた。彼らは自分たちの文化を復興するため、博物館の収蔵品を活用しようと考えることが多くなった。

### 三、台湾原住民族と平埔族の社会的位置付け

台湾は多くのエスニック・グループと多様な文化によって構成されている社会である。台湾の民族構成は、「4大エスニック・グループ」と呼ばれるように、福佬(ホーロー)が70%、客家(ハッカ)が14%、外省人が14%、原住民族が2%となっている。その中で、日本に「先住民」と呼ばれている人たちは、台湾で一般に「原住民族」と呼ばれている。この人たちはオーストロネシア語族に属する言語を母語とし、「原住民族」と「平埔族」に分けられる。このような分類は、清朝時代から、台湾の西部・北部の平地住民で漢化の著しい「熟蕃」と、深い山中に暮らしていて漢族への同化を拒み続けた「生蕃」とに大きく区分されていた

ことである。そのうち、「熟蕃」の方が今では「平埔族」と呼ばれ、「生蕃」は「原住民族」と呼ばれる（笠原 1998:70）。現在、原住民族は憲法に原住民身分を有し、法律に定められた権利を有している。平埔族は先住性があるが漢族に分類され、憲法に原住民身分を持たず、法律に定められた特権を受けることはできない。

1980年代から、台湾社会全体における民主化の進行と1960年代以降の国際的な先住民運動の潮流が受け入れられることを背景として、1988年原住民族は自らの社会的地位の改善を目指す社会運動を開始した。1997年に憲法改正により「原住民族」という名称が憲法の追加修正条文に登場した。それ以降、原住民族の権利、生活の保障や文化の振興に関する法律や制度が整えられ、原住民族の台湾社会における立ち位置は大きく変わっていった（野林 2009:45）。

台湾原住民族の権利回復運動が進む一方で、未だに台湾政府から原住民族としては認定されていない平埔族がいるという現実がある。台湾の各平埔族は原住民族として地位を取り戻すため、1994年以降に「正名運動」と「文化復興」を始めた。2000年代以降、平埔族の政治運動のリーダーたちは国会議員と交渉しはじめ、「平埔族正名運動」、すなわち平埔族の原住民族としての地位を取り戻す運動への協力を求めた。

ところが、2009年中に平埔族の正名運動に大きな影響を与える出来事が発生した。2009年8月にモーラコット台風により、原住民族と平埔族が暮らしている約90の集落が水害や土砂災害などにより大きな被害を被った。その中で、平埔族のタイヴォアン族が多く住んでいたS集落が深層崩壊による土石流の被害を受け、村全体が埋没した。この台風にもたされた大災害によって、平埔族の政治権利と文化復興をめぐる主張に再び注目が集まることとなった。

続いて、2010年代に入ると、台湾の民主進歩党は「移行期正義<sup>1</sup>」の理念に基づいて、過去に植民や外来政権の統治により起きた暴力や間違いを正すことを求めた。その中で、国家から排除されてきた原住民族の権利や主張も無視できないものとされた。

---

<sup>1</sup> 「Transitional Justice」の中国語訳は「転型正義」であり、日本語では「移行期正義」と訳される。国連による移行期正義の定義は、「過去の大規模な人権侵害が遺したものと折り合いをつけようという社会の試みに関するプロセスとメカニズムの総体」である。移行期正義について一般に論点となるのは、以下のようなメカニズムがある：刑事訴追、真実委員会または公聴会、補償、制度改革、公的謝罪、記念物・追悼集会・博物館。

(国連の公式サイト：<https://www.un.org/ruleoflaw/blog/document/the-rule-of-law-and-transitional-justice-in-conflict-and-post-conflict-societies-report-of-the-secretary-general/>)

独裁政権の暴力を生き延びた人たちと犠牲者の遺族たちの声に応えるだけでなく、原住民族にどのように対処するか、および平埔族の原住民族としての先住性と先住権をどのように承認するかという課題、統治者の政策や暴力により分断された社会の和解という問題も提起された。

2015年民主進歩党の代表である蔡英文は第二回目の総統選挙に際して、原住民族が抑圧されてきた歴史観を台湾全体で共有することこそ、異なるエスニック・グループの間に真の和解をもたらし、共同の未来を求めることができるようになることを主張した。そのうえで、施政者は原住民族に正式的に謝罪する必要があると明言した<sup>2</sup>。

ここで注目すべきは、蔡英文が選挙当時のマニフェストにおいて、掲げた政策の1つに、平埔族の法的地位の回復があったことである。いわば、党の中核理念に応えるように、法的な原住民族としての地位がない平埔族に関する人権や権利回復へ関心を見せたことは平埔族の社会的地位のありかたに影響を与えていくことになる。2016年台湾で2回目の政権交代がおこり、民主進歩党が政府与党になり、上記一連の法律改革と実施政策宣言に基づいて中央政府と台湾原住民・平埔族との関係に大きな変化をもたらした。

本報告は2016年から2017年の間に、平埔族の正名運動をめぐる政府側の「原住民身份法」改正に関する検討とシラヤ族の対応、および法律改革の検討・推進により平埔族の社会的位置の変化、民族内部の権力の移行といったことを考察する。

#### 四、台湾における平埔族の政治運動

##### 1. 政府側の平埔族正名に関する政策

平埔族の先住権と身分認定をめぐる課題には3つの議論がある。1つ目は、平埔族が行政システムに包含される経緯と、その位置づけ、先住性を統治者に認められない現状に至るまでの歴史的経緯である(詹 2005; 葉 2013)。2つ目に、「原住民基本法」などの現行法的解釈に基づく、平埔族が原住民としての身分を持つか否かの法学的研究である(王、陳 2013)。3つ目に、平埔族の身分認定の問題を国際人権規約と「移行期正義」の文脈において考えた場合、平埔族の先住権に関する正当性である(謝若蘭 2017)。

---

<sup>2</sup> 蔡英文の選挙当時のマニフェストが総統選挙のための公式サイトに掲載されている。  
<http://iing.tw/posts/46>

より具体的に述べるならば、まず、平埔族の身分認定をめぐる大きな論点になっているのは、「平埔族とみられる人たちは登録している戸籍が原住民ではない」ことである。1956年、1957年、1959年と1963年に、当時の台湾省政府は戸籍管理と選挙事務のために、日本統治時代に平地行政区に住んでおり、戸籍における種族欄に「熟」と登録された人びとのうち、現在も平地行政区に住んでいる人びとは「平地山胞」として登録できる、という公文書を平埔族の居住している地方自治体である県に送った。しかし、平埔族の居住している県に公文書が届かなかったり、公文書がきたとしても地方自治体は積極的に住民に伝達しなかったりすることもあった。それゆえ、平埔族の人たちが知らないうちに登録期限が過ぎて、登録の機会を逃してしまった。戦前に平埔族としての身分を有していた人たちの大半は、戦後になって中央と地方政府の不確実な登録手続きによって、平埔族としての身分を失われたとされている（葉 2013:188-202）。

2016年8月1日に台湾の大統領の蔡英文は歴代政権を代表して、台湾原住民族が受け続けた不公平に対して公式に謝罪した。その中に、「歴代統治者が台湾西部に暮らしている各平埔族の原住民族としての身分を抹消したこと」に対しても謝罪した。そして、蔡英文は「原住民族歴史正義転型正義委員会」（「原住民族歴史正義と移行期正義委員会」、以下、「原転会」）を設立し、自らは召集人として、各原住民族の代表とともに歴史の中に残された課題を向き合い、解決策を探ろうとしている。

同年10月7日に中央政府は「平埔族」を「平埔原住民族」として、その名称を承認した。以後は、平埔族の「身分認定」と「原住民族入り」に必要とされる憲法改正、および「原住民族」としての政治、経済、文化、教育、医療保険などをめぐる政策の策定が求められる。

2017年に原転会における平埔族身分認定課題の担当者は、まず台湾各地で5回の「建構平埔原住民族權利體系諮詢懇談會」（平埔族の原住民族としての権利をめぐる懇談会）を開いて、下記3つの課題について説明した。

(ア)『原住民身份法』を修正する際に、山地原住民、平地原住民の他に、「平埔原住民」のカテゴリーを加えること。

(イ)「平埔原住民」の原住民としての個人権利の取得を後回しにすることである。いわゆる、「平埔原住民」のカテゴリーを『原住民身份法』に加えることができたのち、原住民族委員会は平埔原住民の個人権利に関する法律改正

案を着手すると表明した。

(ウ)平埔族の人たちの身分認定の仕方（平埔原住民身份認定條例）を検討すること。

懇談会において、原住民族委員会が提出した認定方法は、「平埔原住民の身分を有する人は、1945年以前の戸籍が平地行政区にあり、そのうえ、戸籍調査簿に本人ないし直系尊属親（の中の誰か）が平埔族として登録されていた」<sup>3</sup>ことである。

ただし、各平埔族の有識者と政府側の考え方が異なっている点もある。まずは、平埔族の原住民族としての権利を取得するスケジュールが後回しにされることに対する抗議である。次に、原住民族委員会が提出した平埔原住民の身分認定方法では緩やかすぎ、非常に多くの平埔族が登録されるため、各平埔族の有識者は今後の資源配分が減少されることについて危惧している。

平埔族の有識者は上記の意見を懇談会で表明したが、結果として、『原住民身分法』を修正することになり、山地原住民、平地原住民の他に、「平埔原住民族」の Kategorie を加えるという原住民族委員会の提案が行政院に提出された。また、認定方法も同じようにする。

次に、平埔族の中に、早くて地方地自体と連携して正名に関する動きを取り、平埔族の政治的動きに影響力をもっているシラヤ族の正名運動をみていく。

## 2. シラヤ族の正名運動の最新動向

2016年以降中央政府の動きに対する台南シラヤ族の正名運動に深く関わっている2人のリーダー、D氏とW氏の反応について以下に取り上げていく。

D氏は伝統的なシラヤ族のアリッ信仰を保っているG集落出身の50代の男性である。D氏は1997年に故郷に戻って、学習塾の講師として生計を立てながら、多くの時間と精力をシラヤ族の正名運動と文化復興事業に捧げ始めた。D氏は村に住んでいる仲間たちと一緒に「G村文史工作室（G村文化歴史研究所）」を設立し、シラヤ族の記録された歴史と伝わってきた慣習に基づいて、自民族に関

---

<sup>3</sup> 『原住民身分法』における平埔族の身分認定に関する修正条文の原文は「三、平埔原住民:臺灣光復前原籍在平地行政區域内,且戸籍調査簿登記其本人或直系血親尊親屬屬於原住民者。前項第一款、第二款原住民身分,除本法另有規定外,依前項規定認定之;依第三款規定取得平埔原住民身分者,其直系血親卑親屬應依本法其他規定認定其原住民身份。第一項第三款平埔原住民之民族權利,另以法律定之」である。

する文化教育を推進するとともに、国立博物館における展示の企画と収蔵品の熟覧研究もおこなっている。

祭司の家系出身である D 氏は、集落で根付いているアリッ信仰をめぐる行事、儀礼内容と口頭伝説に詳しい。そのため、D 氏はシラヤ文化に関する教育活動をアリッ信仰中心に始めた。近年では、仲間たちと長年の調査と記録した資料により、かつての手工芸や食文化を再現しようと試みている。D 氏は自らの集落を調査するだけでなく、歴史文献に基づいて、台湾南部各地の平埔族集落を踏査した。

W 氏はキリスト教を信仰する SH 集落出身の女性であり、1997 年からシラヤ族の正名運動と文化復興事業に参加するようになった。W 氏はキリスト教信仰に関わりがあるシラヤ語の復原を求めている。W 氏は、17 世紀に新港社にきたオランダ人宣教師の Gravius がラテン文字を用いてシラヤ語で書いた新約聖書の「マタイによる福音書」を基にして、W 氏とフィリピン人の夫 E 氏、言語学研究者の黄氏、施氏、李氏などが 8 年をかけて、17 世紀のオランダ語表記や当時のシラヤ語を読み解くことに取り組み、2008 年に『西拉雅詞彙初探』（シラヤ語彙集）を出版した。

そこから、W 氏はシラヤ語の教育推進、たとえばシラヤ語の教師を育成すること、小学校でシラヤ語を教えること、単語帳などを出版すること、絵本と童謡を製作することを進めている。しかし、現在の生活においてシラヤ語を使う場面はないため、シラヤ語の普及は容易ではない。

平埔族正名に関する政治的活動には、2000 年以降政府と交渉し始めた際に D 氏と W 氏はシラヤ族を代表して会議や抗議集会に参加していた。たとえば、D 氏と W 氏は中央政府に対して、2001 年平埔族が立法院で「政府がどのように各平埔族を承認するか」に関する公聴会をおこなった。また、2004 年以降 2 人は地方自治体である台南県政府と連携して、シラヤ族の各集落の交流活動を開催した。2006 年、台南県政府において「台南県シラヤ原住民族事務委員会」を設立、シラヤ族が県承認の原住民族であることを宣言したとともに、2 人は当委員会の会員に務めた。

2010 年、W 氏は台南市政府の支持を得て、原住民族委員会に「平埔族の平地原住民族」としての身分確認申請書と台南市におけるシラヤ族の登録名簿を提出したが、原住民族委員会は法律に基づく根拠がないためその申請を却下した。

その後、台南市政府は再び W 氏を原告として、原住民族委員会を告訴したが、台北高等裁判所がその上訴を却下した。そこから W 氏は台南市政府とともに法律的な側面の動きを起こしようになった。それに対して、D 氏は地方自治体と連携するより、まず法律改正の権力を握っている原住民族の立法委員とコミュニケーションをとり、さらに民族内部の共通意見をまとめようと動いている。

D 氏と W 氏は 2016 年の 7 月のほぼ同じ時期に方向性の異なる集会をそれぞれおこなった。

2016 年 7 月 16 日、W 氏は台南市政府と共催し、台南で「平埔正名共識會議」をおこなった。会議中に平埔族の各族の代表と研究者が集まり、主催者として「政府に妥協しない」、「原住民族身分法を改正せず」、および「熟」に登録された人とその子孫は直接原住民としての身分を取得すべき」というスローガンを打ち出した。会議において、主催者は「平埔正名共識會議的決議聲明書」（平埔正名共識會議の宣言書）を発表した。この宣言書では、「原住民身分法を改正せず、平埔族のための新法も作らない。即日に平埔族の原住民族として身分と権利を返す」を強く主張した。

一方、同年 7 月 18 日に D 氏とクヴァラン族の B 氏が台北の立法院において「平埔族復名復権論壇」をおこなう前に、台湾における代表的な平埔族の集落と集落の長老を訪れていった。この事前の準備は、論壇をおこなう目的を説明するとともに、蔡総統が原住民族に謝罪する前に平埔族の主張について意思疎通をはかっておくものだった。

当日、立法委員 Kawlo Iyun Pacidal（原住民のアミ族）と台南市議員 Kumu Hacyo（原住民のタイヤル族）は会議に出席して、平埔族正名を支持することと自らの意見を表明した。また、会議において、D 氏と B 氏も声明を提出し、「原住民族身分法を改正せず、即日に原住民族としての身分を直接的に得られ、かつ各平埔族の権利を承認すべきこと」を強く主張していた。

この会議に議論しようとしていたもう 1 つの課題は、「原住民族としての身分を得られたのち、個人の政治、教育、健康保険、経済的権利がいつ得られ、どのように行使できるか」であったが、出席した平埔族の代表の感情的発言が多すぎて、結局、今後の個人権利の取得に関する対策は検討できなかった。この会議を通して平埔族代表の共通意見を打ち出す期待が外れてしまったため、D 氏は大きな挫折を味わった。

結果として、D氏とW氏の声明の共通点は「即日に原住民族としての身分と個人の権利を返す」ことが原則となった。

2017年に入ると、W氏は戦略的に路線を変えた。原住民族としての身分を早く得るために、W氏は原住民族委員会が提出した「原住民族身分法を改正し、平埔族を平埔族として身分法に書き加えること、および平埔族の権利を原住民族とは別の法律で規定する」ことを受け入れた。いわば、この数年間の正名運動の原則である「原住民族身分法を改正せず、平地原住民のカテゴリーで認定され、かつ原住民としての権利を回復すべきこと」を破棄し、政府の提案を受け入れた。

中央政府との交渉が軌道に入ってから、正名運動の元の原則を強く主張しようと思ったD氏は徐々に平埔族の正名運動から除外されてしまった。D氏はそれに気づき、正名運動を続ける気力を失い、正名運動の表舞台から去った。

## 五、平埔族の文化復興

1990年代後半は、平埔族の正名運動は社会的に認知が進んでいなかった。また、平埔族各族の原住民族運動のリーダーたちは文化を伝承する環境を徐々に失い、その存続に危機感を覚えてきたため、故郷に戻って文化を復興することによりエスニック・グループ内部の一体感を高めようとした。

一方、台湾の歴史の中に平埔族を位置づけるために、台湾の各平埔族に関する学術研究の成果が1990年代から積み重ねられてきた。1990年、台湾の中央研究院における台湾歴史研究所準備室に「平埔研究工作小組」（平埔族研究グループ）が設立されたことによって、民間および研究機関の双方において平埔族の歴史、文化に関する調査、研究が重視されるようになってきた。そこで、これらの調査、研究が進むに伴い、平埔族の文化復興に関する事業も進んできた。

ほぼ同時期に、一部の博物館も上記の動きに応えるように、収蔵された平埔族の標本資料、文献、地図などへ注目していくこととなった。そして、2000年代末に台湾の歴史をテーマとする博物館と民族学を専門とする博物館において、平埔族をめぐる企画展示が学術研究の成果に基づいておこなわれるようになった。これまで台湾の平埔族は、ほぼ博物館側のみの考えによって展示されてきた。だが、近年博物館と平埔族の人々とが連携して、平埔族の歴史的な位置付け、および平埔族が現代社会において直面している課題を示すようになった。この一連の博物館の動きは、21世紀以降の平埔族をめぐる展示には彼らの声を反映

して、平埔族は多様な価値観や文化を保持しているいくつかのエスニック・グループであるという認識を示している。

博物館展示にもたされたもう 1 つの影響は、平埔族の博物館の収蔵品に対する態度の変化である。平埔族の人びとは、博物館の収蔵品を観覧することによって、自らの物質文化への関心を高めるようになってきた。このように、平埔族と博物館の双方向的なコミュニケーションおよび平埔族が博物館収蔵品を熟覧することが増えるにつれ、文化復興は新しい方向性に進んできていることが指摘できる。

## 1. G 集落の文化復興

### 1-1 博物館に収蔵された刺繍の活用

G 集落では、台湾における博物館に収蔵されてきた平埔族に関わる資料を手がかりとする文化復興事業がおこなわれてきた。G 集落の文化復興を担当しているのは前述した D 氏であり、文化復興に関する教育活動が「集落の学堂」という集会所で実施している。

G 集落でおこなわれてきた刺繍の手工芸研修は、歴史文献と博物館の収蔵品を手がかりに進められてきた。2016 年の研修では、文化復興のリーダーである D 氏が、まず文献に記録された平埔族とシラヤ族の伝統生活を紹介した。講義の内容は、博物館に収蔵されている刺繍付けの衣類や工芸品の写真を参加者に見せたながら、平埔族とシラヤ族の文化の全体像を紹介するものである。刺繍を施している収蔵品や工芸品をシラヤ文化の中に位置づける工夫が見える。その後、母方の親族が G 集落出身であり、G 村文化歴史研究所に勤めている CYG 氏は講師を務め、集落の学堂において基礎な技法を参加者に説明した。

2016 年 G 集落における刺繍実践の目標は、参加者各自の住所の番地を示す表札を完成させることであった。使われた刺繍の模様は、D 氏がもつ博物館の刺繍製品の写真をもとにして、CYG 氏が表札の大きさに合わせて、伝統的な模様を組み合わせる 7 つの種類デザインをした。参加者は好きな模様を選べた。刺繍の色彩も刺繍の製作者が決めることができた。ただし、できるだけ伝統的な白い生地を使うことが勧められた。2016 年 12 月上旬に研修の参加者たちの作品がほぼ完成した。

### 1-2 集落の環境整備と刺繍模様の活用

2000年代から、D氏と集落に住んでいる友人たちは「G集落文化と歴史協会」を結成し、台南市政府などの政府機関の補助金をもらい、町づくりの推進に取り組んできた。とくにG集落の年中行事が国の無形民俗文化財に指定されてからは、多くの観光客や見学者が足を運ぶと予想されたため、村の環境整備が始まった。近年行なわれたその動きを下記に挙げる。

- 2006年 村のガイドシステム（伝統信仰における神様を祀る大、小公廨の見学）、疎水沿いの洗濯場、村の入り口の改造、陶製の壁絵
- 2008年 G集落の年中行事の「夜祭」が台南市の市指定「民俗信仰」無形文化財に指定される。
- 2012年 原住民族委員会「平埔族集落活力計画」を実行。文化復興をするための3年の資金を獲得。
- 2013年 G集落の夜祭が「国家重要民俗活動」に指定される。

2014年、D氏は集落にある空き家を文化の振興と教育のために「集落の学堂」を設立する計画をたてた。その後、空き家を改修するために、台南市政府の民族事務委員会を通じて、D氏が提出した「文化観光の環境整備」計画（G集落推動文化観光環境改善計畫）を交通部に属する観光局が承認し、およそ100万元（日本円で約370万円）の経費が捻出された。同年の6月から11月まで、この空き家におけるインテリアデザインの設計と改修を行った。その結果、その年の年末ごろ、「集落の学堂」が正式な公共的空間としてオープンした。

学堂の改修が完成したのち、D氏はさらに村全体の環境整備を構想し始めた。2015年11月に、観光局はD氏の申請した「観光環境の整備事業」（臺南市東山区G集落地區觀光旅遊環境建置）計画を採用した。今回の計画も「優雅な農民」に依頼された。プロジェクトを担当した「優雅な農民」の一員である芸術家W氏は、G集落の特徴とシラヤ文化の要素を新たな環境整備に入れるため、度々村に訪れ、イベントをおこなって小学生や年上の人たちとの交流をおこなった。

2016年の5月に、シラヤ人の口頭伝説、歴史や刺繍の模様を含まれる記念物、モザイク画で装飾される休憩場所、ゆるキャラのフィギュアが集落に設置された。設置する前に、D氏は設置予定地の持ち主に計画内容を説明していたため、皆がその目的を認めていた。

### 1-3 刺繍を施した衣装に関する調査

将来、祭りの際に民族衣装を着ることができるようするために、2017年に

G 集落出身の D 氏は「平埔族集落活力計画」という台湾の原住民族委員会が提供する資金を利用して、博物館に収蔵されるシラヤ族の衣装を再製するための資料調査を始めた。

報告者は 2017 年に D 氏が実行していた「平埔族集落活力計画」および「台湾歴史博物館と台湾西南山海コミュニティの地方学」調査計画を参与観察していた。以下、この 2 つの計画により実行したシラヤ族の衣装をめぐる調査の内容を記述する。

### 1-3-1 台南市自然史教育館のシラヤ関係の収蔵品

シラヤ族の伝統的な形式をもつ衣装の大部分は、現在では博物館に収蔵されている。それ故、シラヤ人はかつての衣装を復原するために、博物館に資料を求めざるをえない。2017 年、G 集落の文化復興のリーダーである D 氏は台南市の左鎮区を中心にシラヤ族の衣装の調査を進めた。左鎮区には多くのシラヤ族の集落が点在しており、この地域にある「台南市自然史教育館」は、自然科学の標本の他に、地方文化、とくにシラヤ族の衣装や生活道具などを収蔵している。

台南市自然史教育館に収蔵されているシラヤ族の収蔵品は左鎮教会と陳春木氏から寄贈されたものである。さらに、左鎮教会の収蔵品はそこに牧師として勤めていた張氏が寄贈したものである。国立台湾歴史博物館によれば、左鎮教会の収蔵品のうち衣装は 20 点である。その中に、シラヤ人がよく使っている刺繍模様の付いている衣装は 6 点ある。一方、陳春木氏は 20 世紀半ばに左鎮地域の化石と住民の生活道具を収集するとともに、著名な人類学者である劉斌雄の調査でインフォーマントも務めた経験を有していた。

### 1-3-2 刺繍を施される収蔵品をめぐる調査・記録

シラヤ族の衣装を記録・再製するために、D 氏は高雄市にある SD 大学に勤めている設計を専門とする C 氏と共同研究をおこなった。まず台南市自然史教育館を訪れ、収蔵されているシラヤ族の衣装類の収蔵品を熟覧した。主な内容は男性と女性の上着、スカートや帯のサイズを計り、型紙を描き、カラーカードで布の色を識別したことである。また、C 氏は衣装に施されている刺繍模様を撮影して、模様のパターンを分析しようと計画している。

D 氏は博物館を訪れて平埔族の刺繍が施される収蔵品の調査をおこなうだけでなく、2017 年の前半に国立博物館が依頼した調査計画も実施した。台南に立

地する国立台湾歴史博物館は地方との繋がりを強くなるために、同館の「臺史博と臺灣西南山海社群地方学」計画を台南出身のシラヤ人である D 氏に依頼して関連の調査をおこなった。

博物館側の担当者の C 氏と D 氏は、1947 年に劉斌雄氏が撮った写真を左鎮区のシラヤ族の住民に見せた。このワークショップに参加した住民たちは写真を見ながら、写真の内容、たとえば人物、景色、産業などについて皆一緒に議論し、写真の内容を記述しようとした。

今回報告者も参加した現地調査により、台南市自然史教育館に収蔵されている婚姻時の新婦の服装一式（上着、スカート、おび、肩かけ）の原所有者が分かった。また、原所有者の孫である I 氏はお祖母さんの人柄、新婦の服装の着方、新婦の服装をまつわる物語を述べた。

博物館が収蔵資料を収蔵地に戻して SB 集落の住民をインタビューすることにより、博物館側が収蔵品の背景についての情報を集積しただけでなく、SB 集落の住民には文化や歴史に関する記憶も想起させた。

## 六、S 集落の文化復興

### 1. 文化復興と博物館収蔵品の活用

ここでは、水害前に S 集落に生活していた人びとによる災害後のタイヴォアン族としての民族アイデンティティを創出する動きに着目する。

災害を受けた人々が復興のプロセスにおいて自らの歴史・伝統文化と自らとを結び直すことにより、原住民としての意識が高まって、原住民としての文化復興の動きを始めたことも本報告の関心である。とくに、文化復興事業の一環としての刺繍工芸を取り上げ、その発展の経緯およびエスニシティを打ち出すうえで果たした役割を、現地調査で得られたデータをもとに示す。

本報告の調査地である S 集落は、2009 年 8 月 7 日に台湾を襲ったモーラコット台風の豪雨により、村の後ろにそびえる献肚山において大規模な深層崩壊が発生し、集落ほぼ全体が土石に埋没した。この災害で多くのタイヴォアンの人々が犠牲になるとともに、家屋や家財が消失した。その中には、伝統的なタイヴォアン文化も含まれており、これらがほぼすべて失われ、またタイヴォアン文化について精通する人々が亡くなったことから、タイヴォアン文化そのものが継承されず、消失してしまうことが危ぶまれた。そこで、災害後の人命救助の終了後、

中央政府、地方政府と文化研究に携わる研究者は、S 集落の文化復興事業を支援し始めた。S 集落の住民も水害をきっかけにして、中央政府に「原住民として認める」ということを求めるようになった。また、災害後一連の文化研修により、S 集落の住民は自らがタイヴォアン族としての意識を強めた。彼らが自分たちの文化を復興するための手段として、博物館の収蔵品が活用できると考えられるようになった。

## 2. タイヴォアン族の刺繍工芸の再興

S 集落における文化復興事業の過程を整理すると、4 つの出来事を観察した。

- (1) 博物館と S 集落のほとんどの住民と協働したこと。
- (2) タイヴォアン族とみなされた博物館資料が出版されたこと。
- (3) 博物館に収蔵されたシラヤ族、もしくはタイヴォアン族とみなされた資料が注目されたこと。
- (4) 上記の発展に従って、S 集落に刺繍の研修をおこなったこと。

それぞれの事業内容について、以下に 4 点を分けて記述する。

### 2.1 博物館と住民の協働

2009 年の水害後、S 集落の一部の住民が暫く仮設住宅地で居住していた。2010 年以降、恒久住宅の設計と所在地に対する考え方が違うため、もとの S 集落の村民は 3 つのコミュニティ——小愛小林・日光小林・五里埔小林——に分かれて居住するようになっている。そこから、3 つのコミュニティは徐々に各自の文化復興と産業振興の道を歩んでいくことになった。その中で、日光小林コミュニティでは、若い人が中心になって「大満舞団」を成立し、積極的に文化復興事業をおこなったり、主導したりしている。

2013 年から 2014 年にかけて、小林平埔族群文物館では、常設展示の企画が始まった。この文物館の設立目的は、「S 集落のかつての生活と行事に基づいて、昔の S 集落における平埔族文化を再現することにより、平埔族の歴史と文化を考え直す機会をつくり出すこと」である。

展示の企画における、協働者は災害後に三箇所に分かれて居住するようになった元 S 集落の村民である。展示の枠組みは、タイヴォアン文化の研究者、物質文化の研究者と博物館のキュレーターが作成し、3 つの村で公聴会を開いて、村民と議論が交わされた。その結果、高雄市に立地する高雄市立歴史博物館は村民の意見をまとめ、展示テーマを「家に帰ろう—S 集落の物語」に定めた。展示

には、タイヴォアン族が S 集落に定住するまでの移住の過程、災害前の日常生活、生業活動、手工芸、年中行事と祭りを展示するとともに、水害後の生活復旧と未来への展望も示した。さらに、この展示を通じて、来館者が平埔族の歴史文化を理解することが狙いとされた。

## 2.2 タイヴォアン族の収蔵資料が出版物に

2014 年、小林平埔族群博物館の常設展示にある刺繍布の出展に合わせて『針線下的繽紛：大武壠平埔衣飾與刺繍藏品圖録』（鮮やかな刺繍：平埔族のタイヴォアン族衣装と刺繍の収蔵品）という図録が出版された。この図録を編集したのは台湾大学の人類学系に所属していた胡家瑜教授であった。胡は、台湾原住民族の物質文化研究の第一人者であるとともに、博物館資料の画像、情報のデジタル化とその国際的な発信に尽力してきた研究者である。現在は、すでに台湾大学を退職しているが、同大の人類学博物館の館長を務めており台湾原住民族研究に関わる国際学会やシンポジウムでも、物質文化研究、博物館学の分野における研究成果を発信しつづけている。

胡家瑜教授は高雄市立歴史博物館に依頼され、2013 年から国内外の博物館に収蔵されていたタイヴォアンのものと記録されている衣服に関する資料の調査をおこなった。同時に、台湾の高雄にある荖濃集落と小林コミュニティでフィールド調査をおこない、収蔵品に関して現地で継承されてきた情報を収集し、それらをあわせて本書を編集した。

この本に収録されている刺繍の工芸は、台湾のいくつかの博物館に収蔵されているタイヴォアン文化の特徴を有する衣服や刺繍が施された肩掛け、布、帯、頭巾や袋である。また、刺繍の模様は、球状の花、菱形、菱と十字、連続山形、幾何様式、草花模様、動物模様、縞模様、記号形、帯に施される模様という 10 種類に分類された。この図録に掲載されている刺繍工芸品と、その上に施された様々な模様は、タイヴォアン族の文化を復興する際に文化の表象を再構築する重要な拠り所となった。

## 2.3 注目されたタイヴォアン族の収蔵品

小林平埔族群博物館の常設展示が開かれる前に、台湾内外の博物館には、タイヴォアンや他の平埔族の刺繍に関わる収蔵品があり、展示会を通して公開されることもあった。例えば、台湾の国立台湾大学人類学博物館では 1930 年代前後、日本の天理大学付属の天理参考館には 1970 年代前後のタイヴォア人の衣装や刺

繡が施された布が収蔵されている。こうした収蔵品は、国立台湾大学の人類学博物館の常設展示（2010年～）、「台湾平埔族(へいほぞく)のものがたり —歴史の流れと生活文化の記憶—」（天理参考館・2014年）といった、平埔族の歴史や文化を主題とした展示会で公開されている。

衣服や持ち物に刺繡を施すという習慣は、現代のタイヴォアン社会では衰退しており、その技術も継承されてこなかった。しかし、歴史的な実物資料の存在に気づくことにより、文化復興の過程において博物館の資料を活用するというアイデアが、復興の当事者の間で考えられるようになった。S集落でも、博物館の収蔵品を活用し、刺繡という手工芸を文化の象徴的な要素として取り上げる動きが始まった。

2015年5月に、タイヴォアン族の文化復興担当者のWML氏と、シラヤ族の正名運動と文化復興の推進者であるD氏は、国立台湾大学人類学博物館を訪問して、高雄地域で収蔵されたとされるシラヤ系と記録された衣服、帯、頭巾を熟覧した。上記の資料は、1930年と1932年に当時の台北帝国大学土俗人種学研究室と馬淵東一、水野鶴吉が収集したものである。熟覧調査には『針線下的繽紛』の著者である胡も同席し、タイヴォアン族の刺繡の特徴や技法に関わる議論をWML氏がおこなった。

さらに3週間後、被災後の復興過程で小林コミュニティに作られていたダンスグループである「大満舞団」の人たちが人類学博物館の見学と資料の熟覧に訪れた。大満舞団の団長は先述したWML氏であり、日光小林コミュニティに在住している団員を連れて台湾大学の人類学博物館を訪問したのである。

この際に、来訪者のうちの8人は高雄地域に収蔵されたシラヤ系の集団のものとされる衣類を熟覧した。この8人の中には、刺繡工芸に携わる4人の女性が含まれていた。彼女らは、「自分の祖先が刺繡したものを見ることができて、それに衣装の上の様々な刺繡手法と綺麗な模様をみて、すごく感動した」と感想を述べていた。

## 2.4 S集落に刺繡の研修

現地コミュニティの人々による博物館資料の熟覧の後、2015年7月から9月にかけて、小林平埔族群文物館が主催して、隣接するコミュニティセンターを会場にして、タイヴォアン族の刺繡を伝承するための研修がおこなわれた。この時の講師は、S集落よりさらに山奥の那瑪夏集落に住んでいる原住民族のブヌン族

のLWM氏であった。研修には、前述した『針線下的繽紛』が教本として使用された。同書に掲載されている刺繍の模様、刺繍工芸品の様式が教えられるとともに、LWM氏は、同書に掲載されていた伝統的な半円形の檳榔袋の構造を示しながら、参加者にその作り方を教え、これによって博物館の収蔵品の復元が参加者によっておこなわれた。

上記の研修で制作された刺繍工芸品は2015年10月に五里埔小林コミュニティでおこなった伝統行事の夜祭の期日に合わせて、小林平埔族群博物館で展示された。臨時展示の会場は小林平埔族群博物館2階にある図書室の隣のスペースであった。刺繍研修に参加した数人の村民は、臨時展示の会場を設営するため、村周辺によく見られ、使われる月桃、藤、バナナの葉などの植物で飾られ、タイヴォアン族と自然環境のつながりを示そうとした。展示会当日には、刺繍研修の参加者は出展作品の説明も担当した。

2016年、小林平埔族群博物館では、刺繍工芸の普及事業に人的、予算的措置がとられなかった。一方、日光小林コミュニティは、行政院に属する原住民族事務委員会が平埔族の文化・言語を振興するために設けた「平埔族群聚落活力計画」の助成事業に申請し、それが認められたため刺繍の研修を自分たち自身でおこなうことが可能となった。

日光小林コミュニティで実施した刺繍研修は4月から6月の3ヶ月にわたった。前年に実施した普及事業との大きな違いの1つは、タイヴォアン族の伝統工芸研究者であるSYC氏が指導にあたったということである。今回の授業の目的について、SYC氏は次のように述べていた。「刺繍は形だけあるでは不十分だ。今年の目標は、日光S集落では、大人を授業の対象にして、分析された紋様とその刺繍技法を復元することである。」(SYC、2016、5、12)

同時に、SYC氏は文化復興と博物館資源の活用について、次のように述べていた。「文化復興とは、心からその必要性を認め、長期的に努力し、目標を立ててやるしかないことだ。私は自分の民族に対する責任として、この作業をやり続けていきたい。博物館の刺繍収蔵品に含まれている知識と技術は、刺繍に対する知識と技術をもっている人にしか解けない。一度消失した刺繍の技術を再建するために、論理的な分析能力が重要だ。」(SYC、2016、5、12)。

研修を通じた刺繍工芸の浸透は、コミュニティの人々が日常的に刺繍制作を始めるきっかけも作っていった。2015年7月からの研修の後、五里埔小林コミ

ユニティ村民の YSS 氏は図録に掲載した檳榔袋の様式と、刺繍模様を模倣した檳榔袋を制作した。

YSS 氏は、五里埔小林コミュニティの南に位置する寶隆村で生まれ育った 50 代の女性である。S 集落出身の夫と結婚してから S 集落で農業を営むかわら、出稼ぎをしたりして生計をたてていた。八八水害が発生した後、YSS 氏夫婦はずっと生活復旧に向けて努めてきた。復興住宅に入居してから、五里埔小林のコミュニティの復旧工事、産業振興や消防安全などの事務にも積極的に参加している。YSS 氏は、もともと手工芸に興味を持っていたことから、2014 年に開始された刺繍研修に熱心に参加し、仕事や家事以外の空いている時間を利用して、研修以外でも刺繍制作を続けた。

YSS 氏は、『針線下的續紛』を参照して制作した袋の 1 つを、図録の著者である胡に贈呈した。檳榔袋を受け取った胡は、檳榔袋を元 S 集落の住民が博物館の収蔵品を基にして初めて制作した物であり、民族資料として一定の価値を認め、それを人類学博物館の資料として収蔵することにした。YSS 氏は、この時に制作した他の檳榔袋を小林平埔族群文物館にあるみやげ物販売コーナーにおさめ、それらは商品として売られることになった。

約 4 年にわたり、刺繍制作の経験を積んできた YSS 氏は、刺繍の実践を重ねてタイヴォアン族の刺繍の特徴を把握するようになった。YSS 氏はこれらの刺繍を衣装、装飾布、テーブル敷き、暖簾または巾着やバッグなどにほどこした。

留意しておくべきことは、YSS 氏が制作する刺繍工芸品は、その活用の方法が二通りに分かれていたことである。それは、文化的な意義が含まれていて販売しないで自分たちで使用するもの、もう 1 つは商品として販売するものである。前者は、刺繍が施されている伝統的な服装、頭巾や帯であり、祭りの日にしか使わないものである。例えば、2016 年 10 月に S 集落で夜祭がおこなわれた際に、YSS 氏は自分自身が作った刺繍が施されている肩掛けと頭巾を着て祭りに参加した。

一方で、商品として販売しているものはコップ敷き、巾着やバッグなどの布小物である。これらの製品は、地元で生産された農産物と他の原住民族に関するみやげ物とともに、小林平埔族群文物館の入り口付近に設置されている販売コーナーで売られている。

2016 年からは、YSS 氏と五里埔小林コミュニティに在住している彼女の親友

の WYC 氏は、タイヴォアンの刺繍の技術と模様をつけたコップ敷きや巾着を受注販売した。コップ敷きを発注したのは小林小学校であり、材料費を含めて 1 個 150 元（日本円はおよそ 520 円）で販売された。これは、博物館で販売されている価格よりも 50 元安い。巾着は、とある医療機関が 1,000 個、発注したものを受けて、制作、販売していた。医療機関側では予算が限られているため、一個 400 元という希望がだされ、YSS 氏らはこの条件で受注した。YSS 氏はタイヴォアンの特徴を有する刺繍品を商品として販売することに否定的ではないが、販売品の単価を考慮すると収益が大きくあがっているとは考えにくいであろう。

一方、タイヴォアンの刺繍の技術や模様を活かした商品の開発や販売に否定的な住民も存在する。元 S 集落出身の 30 代の PPT 氏は、八八水害の後に故郷に戻って、日光小林コミュニティに暮らしている。現在 PPT 氏は日光小林コミュニティにおける文化復興を推進する団体に参加し、活動している。PPT 氏は以下のように述べた。「実際に刺繍をしてその難しさを知ることにより、刺繍品をより大切にしたくなる。とくに、自らの民族衣装を他の民族の人に売るとは、自らの文化に敬意を持たないと思う」。十数時間か十数日かけて完成した刺繍品を販売する際にいくらで売ったほうがいいのか、祖先と繋がりがある刺繍品の価値はお金で測れるものなのか」という疑問を呈し、自らが制作した刺繍製品の販売には否定的な態度をとっている（PPT 氏、2016 年 11 月 23 日）。刺繍工芸に従事する他に、現在 PPT 氏は「大満舞団」を中心にして活動をしていて、演劇と歌謡を通してタイヴォアン文化の発信に努めている。

## 七、結論

本報告では、台湾の中央政府が提出した平埔族に関する政策と、平埔族がおこなわれている正名運動の最新動向および、シラヤ族とタイヴォアン族の、被災後の復興活動における刺繍工芸品の復興制作に着目した。それにより、平埔族の社会的位置の変化、博物館の資料やそれに関する学術研究が民族アイデンティティに与えた影響と、現地の当事者たちが刺繍工芸に対する認識をどのように変化させてきたかについて記述してきた。そこから明らかになったことを、以下のようにまとめる。

まずは、およそ 25 年間続いてきた正名運動と政治交渉は、社会全体の雰囲気が変わりつつ、移行期正義を主張する民進党が執政与党になると、中央政府に受け入れられ、法律改正の検討が始められるようになった。しかし、2016 年と 2017 年の報告者の調査により、政府との対話と交渉が軌道に乗ってから、平埔族に属

するシラヤ族同士の関係に亀裂があることがわかった。

その原因を詳しく見ていくと、それは正名運動の理念と実行戦略が分裂したことである。平埔族の正名運動のリーダーである W 氏が「まず原住民族としての身分を確立する」という行政側の主張に賛成したことに対して、D 氏は認めなかった。D 氏は「身分と権利の獲得」を切り離すことになれば、数年来の正名運動とその主張の意味がなくなると考えていた。なぜなら、平埔「原住民族」という名前が承認されるだけで、平埔族の人びとは実際に原住民族としての権利は何も行使できないと考えたのである。

続いて、シラヤ族とタイヴォアン族の刺繍再興に関する調査から得られたことは、G 集落と S 集落の文化復興の過程において刺繍を施した製品の真正性に対する考え方が異なることであった。

G 集落における文化復興のリーダーである D 氏の文化復興の戦略は歴史文献と博物館の衣装資料に基づいて、自民族の歴史と文化の連続性を示すことであった。すなわち、刺繍工芸をシラヤ族伝統文化に位置付けたうえで、刺繍の研修を推進し、集落に普及させる試みをおこなった。また、D 氏は台湾の博物館のシラヤ族と関連性がある収蔵品に関心を持ち、国立台湾歴史博物館と連携して台南市におけるシラヤ族の物質文化、特に衣装と記憶をめぐる幅広い調査をおこなった。その調査の結果により、シラヤ族の人がもつ刺繍製品をめぐるデータベースの蓄積がもう一歩前に進んだと考えられる。

S 集落の刺繍工芸の再興では、日常的に刺繍を制作することが重要視された。現在、S 集落で制作される刺繍工芸品は 2 種類に分かれていた。それは、伝統行事である祭りの際に着用する衣装という販売できないものであり、もう 1 つは商品として販売する刺繍付きの小物である。これらは対照的な存在である。すなわち、タイヴォアンの刺繍製品と刺繍の模様を「祖先との繋がり」とみなして、刺繍製品の開発や販売に賛否両論が生じたことがわかった。

両者が異なる過程を持った背景として考えられることは、G 集落と S 集落の文化復興の過程におこなう刺繍の実践および博物館との連携はリーダーの目的により異なった戦略を選んだことであった。G 集落の文化復興のリーダーは文化の歴史的根拠を重視し、より広い「台南のシラヤ族が共通する物質文化」というイメージを構築しようとしていた。それに対して、S 集落における文化復興のリーダーは自然災害後、生き残った村民たちの民族アイデンティティのよりど

ころを築くため、タイヴォアン族の文化的象徴となる刺繍を日常生活の中で結びつけることによって、民族表象を再生産し、エスニシティの可視化を試みていることとなった。

台湾社会が移転期正義という理念を受けつつある現在、と平埔族の「自らの名前を取り戻す」という正名運動の要求を徐々に政府に理解されるようになった。また、台湾において平埔族のものを収蔵している博物館も各平埔族と連携して、収蔵品に関わっている文化的背景資料を収集するとともに、現在生きている当該エスニック・グループの人々の文化復興に力を注いでいる。

今後はこれまでの研究成果をより発展させ、民族内部のアイデンティティ形成の過程を明らかにするために、各集落の間の相互作用をめぐる課題に取り組む。それが、積極的な包摂的社会環境の形成に結びついていることも視野に入れた研究を進めることである。

## 参考文献

和文

笠原政治

- 1998 「民族のモザイク」日本順益台湾原住民研究会（編）『台湾原住民研究への招待』Pp.69-73、東京：風響社

清水純

- 2005 「平埔」綾部恒雄監修、末成道男・曾士才（編）『講座 世界の先住民族—ファースト・ピープルズの現在—01 東アジア』Pp.106-123、東京：明石書店

野林厚志

- 2009 「文化資源としての創作物—原住民族芸術をめぐる民族の関係性」『民族芸術』25：44-49。

中文

王泰升、陳怡君

- 2013 「從「認同」到「認定」——西拉雅人的原住民身份認定問題」『台灣原住民族研究學報』3（2）：1-20

胡家瑜

- 2014 『針線下的繽紛：大武壠平埔衣飾與刺繡藏品圖錄』高雄市立歷史博物館

洪麗完

- 2012 「嘉南平原沿山熟番移住社會之形成暨其社會生活考察(1760-1945)」『歷史人類學刊』10（1）：31-86。

葉高華

- 2013 「排除？還是放棄？平埔族與山胞身份認定」『臺灣史研究』20(3)：177-206

詹素娟

- 2005 「臺灣平埔族的身分認定與變遷（1895-1960）——以戶口制度與國勢調查的「種族分類為中心」」『臺灣史研究』12（2）：121-166

謝若蘭

- 2017 『在，之間。in between：認同與實踐之間的學術研究儀式』台北：稻鄉出版社